

小学校国語科における 伝えたいことを的確に書くことができる児童の育成 —— 構成を意識した「気付く・考える・見直す」の学習を通して ——

長期研修員 宮崎 正子

本研究は、小学校国語科「書くこと」の領域において、構成を意識した「気付く・考える・見直す」の学習を通して、伝えたいことを的確に書くことができる児童の育成を目指したものである。まず、頭括型・尾括型・双括型のモデル文を基に構成の違いによる効果に気付かせ、自分が書こうとしている文章構成への見通しを持たせる。次に、形式段落ごとに文章の性質を明らかにして必要に応じたつなぎ言葉を用いて構成を考えさせ、段落相互の関係が明確な、構成の違いによる効果を生かした構成表を作成する。その次に、グループで下書きと構成表を照らし合わせて読み、構成に視点を当て気付いたことを伝え合いシートを通して伝え合い、構成表や下書きを見直し推敲させる。これらの学習が、伝えたいことを的確に書くことができる児童の育成に有効であることを実践を通して明らかにした。

キーワード 【国語ー小 構成 構成表 文章の性質 つなぎ言葉 伝え合いシート】

群馬県総合教育センター

分類番号：G01-02 平成26年度 252集

I 主題設定の理由

平成25年度全国学力・学習状況調査小学校第6学年国語では、「A知識」に比べ「B活用」の平均正答率が低く、特に、「書くこと」の平均正答率は、43.9%と3領域の中で最も低い結果であった。この課題解決に向け、同調査報告書では「文の中での語句の係り方や照応の仕方に気付き、いろいろな文の構成があることについて理解できるようにする必要がある」と指摘している。群馬県でも全国と同じ傾向にあり、特に「B活用」については、全国平均正答率と比較して差が大きく、はばたく群馬の指導プラン（平成24年3月）において国語科の課題として「文章の特徴や表現の仕方について考えること」「自分の考えや伝えるべき内容を相手や目的に応じて表現すること」などを挙げている。また、同調査において、研究協力校で正答率が低かった問題は、「目的や意図に応じ、複数の内容を関連付けながら、自分の考えを具体的に書く」「接続語を使って1文を2文に分けて書く」「目的や意図に応じ、必要な内容を適切に引用して書く」であった。このことから、「書くこと」に課題があることが分かった。

研究協力校第6学年92名へのアンケート結果では、「文を書くことが嫌い」と答えた児童が23人、理由として、「どう書いたらいいかわからないから」「文がまとまらないから」「うまく書けないから」などが挙げられた。これは、構成の意識が薄いことによるためである。そこで、これらの課題を解決し、児童の中にある「自分の思いや考えが伝わるように書きたい」という思いの実現に向けて構成を意識した学習を取り入れる必要があると考えた。

構成を意識した学習とは、次のような学習である。まず、相手意識や目的意識を持たせることにより、伝えたいことを明確にさせる。そして、頭括型・尾括型・双括型の「構成3パターン」のモデル文を基にした構成の違いによる効果に気付かせる学習を組み込む。この学習により、自分が書こうとしている文章構成への見通しを持つことができると考える。次に、この文章構成への見通しを生かし、形式段落ごとに文章の性質を明らかにし、必要に応じた適切なつなぎ言葉を用いて構成を考え構成表を作成させる。この学習により、形式段落相互の関係が明確な、構成の違いによる効果を生かした構成表を作成することができる。そして、この構成表を基に下書きをする。その次に、グループで下書きと構成表を照らし合わせて読み、構成に視点を当て気付いたことを伝え合いシートを通して伝え合う。そして、友達の気付きを受け、構成表や下書きを見直し推敲し、清書に結び付ける。このような学習により、伝えたいことを的確に書くことができる児童を育成できると考える。そして、書き上がった文章を相手意識を持つ際に設定した相手に読んでもらい、適切な評価や感想をもらうことを通して、児童の中にある「自分の思いや考えが伝わるように書きたい」という思いが結実すると考える。

以上のことから、小学校国語科「書くこと」の領域において、構成を意識した「気付く・考える・見直す」の学習を通して、伝えたいことを的確に書くことができる児童を育成したいと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

小学校国語科「書くこと」の領域において、伝えたいことを的確に書くことができる児童を育成するために、構成を意識した「気付く・考える・見直す」の学習の有効性を明らかにする。

III 研究仮説（研究の見直し）

1 構成の見直しを持つこと

構成を学ぶ過程において、頭括型・尾括型・双括型のモデル文を基にした構成の違いによる効果に気付かせることにより、文章構成への見直しを持つことができるであろう。

2 効果的な構成にすること

構成表を作成する過程において、形式段落ごとに文章の性質を明らかにし、必要に応じた適切なつ

なぎ言葉を用いて構成を考えさせることにより、形式段落相互の関係が明確な、構成の違いによる効果を生かした構成にすることができるであろう。

3 的確に伝えることができる文章にすること

推敲する過程において、グループで下書きと構成表を照らし合わせて読み、構成に視点を当て気付いたことを伝え合いシートを通して伝え合い、構成表や下書きを見直し推敲させることにより、伝えたいことを的確に伝えることができる文章にすることができるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「伝えたいことを的確に書く」とは

テーマにある「伝えたいことを的確に書く」とは、書き手である自分の伝えたい思いや考えを明確にして、読み手に的確に伝えることができる文章を書くこととする。伝えたい思いや考えを明確にするためには、まず、相手意識や目的意識を持たせることが重要となる。相手意識や目的意識を持ち明確になった伝えたいことを、読み手に的確に伝えるために、どの題材をどこに配置してどのような文章の組立てで書くかという、文章の構成を考えて書くことが伝えたいことを的確に書くことにつながると考える。

(2) 「気付く・考える・見直す」とは

構成を学ぶ過程において、頭括型・尾括型・双括型のモデル文を基に構成の違いによる効果をつかませる学習を「気付く」とする。構成表を作成する過程において、形式段落ごとに文章の性質を明らかにし、必要に応じたつなぎ言葉を用いて構成を考える学習を「考える」とする。推敲する過程において、グループで、下書きと構成表を照らし合わせて読み、構成に視点を当て気付いたことを伝え合いシートを通して伝え合い、構成表や下書きを見直し推敲する学習を「見直す」とする。この三つの学習をまとめて「気付く・考える・見直す」とする。

(3) 構成を学ぶ過程について(「気付く」)

構成を学ぶ過程では、「構成3パターン」のモデル文を基にした学習を組み込むことにより、児童は構成の違いによる効果に気づき、自分が書こうとしている文章構成への見通しを持つことができると考える。

① 「構成3パターン」について

文章構成において、統括する内容の位置付ける箇所によって、冒頭部で統括する場合を「頭括型」、終結部で統括する場合を「尾括型」、冒頭部・終結部の双方で統括する場合を「双括型」という。この三つの構成をまとめて「構成3パターン」とする。「構成3パターン」は、文章を書く際の様々な場面で基本となり、また日常生活の中でも応用できる構成のパターンであると考えられる。このことから、文章全体の構成をこの三つに絞って指導をする。

② モデル文について

頭括型・尾括型・双括型の三つの型別に示した手本となる文章をモデル文とする(図1※著作権の関係で原文のみ記載。実践では、文章の量・形式段落の数・つなぎ言葉に着目し児童の実態に応じて編集した頭括型・尾括型・双括型のモデル文を活用した)。



図1 モデル文の原文

三つのモデル文を読み比べたり、構成表を基に文章の組み立て方や形式段落相互の関係をおさえ構成の分析をしたり(図2)することにより、構成の違いによる効果に気づき、文章構成への見通しを持つことができると考える。

(4) 構成表を作成する過程について(「考える」)

構成表を作成する過程では、構成を学ぶ過程で持つことができた文章構成への見通しを生かし、構成表を作成する。形式段落ごとに文章の性質を明らかにし、必要に応じたつなぎ言葉を用いて構成を考えることにより、形式段落相互の関係が明確な、構成の違いによる効果を生かした構成にすることができると考える。

① 構成表について

形式段落ごとに書く題材を付箋紙に書き、「構成3パターン」のどの構成で書くかを明らかにし、「初め」「中」「終わり」に付箋紙を配置しながら、構成を考える。相手意識、目的意識を持つことにより明確になった一番伝えたいことは、ピンク色の付箋紙に文章ではっきりと書き、それを伝えるための題材は、言葉や短い文で水色の付箋紙に書く。

付箋紙の配置が決まると次に、形式段落ごとに文章の性質を明らかにし、必要に応じた適切なつなぎ言葉を用いて構成を考える。さらに、構成の選択理由や工夫について構成表に記入する。

このようにして作成した構成表を基に下書きをする。

② 文章の性質について

文章の性質とは、文末表現に着目し八つに分類してまとめた「文末表現で見る文の性質表」を基に、形式段落ごとに明らかにした文章の性質である。「文末表現で見る文の性質表」は、「鹿屋市立輝北小学校校内研修資料」を参考にして《疑問の文》《事実の文》《意見・感想・思い・考えの文》《命令の文》《推定の文》《伝聞の文》《誘いの文》《理由の文》に分類して作成した表である(図3)。

③ つなぎ言葉について

つなぎ言葉とは、形式段落をつなぐ言葉とする。形式段落相互の関係が明確となるように、十の役割別にまとめた「つなぎ言葉表」を基に必要なに応じて適切に用いる。「つなぎ言葉表」は「鹿屋市立輝北小学校校内研修資料」を参考にして〈理由を表すとき〉〈まとめ・結果・結論を表すとき〉〈前の文を受けるとき〉〈前の文を打ち消すとき〉〈前の文に付け加えるとき〉〈話題を変えるとき〉〈同じ内容を並べるとき〉〈例を表すとき〉〈順序を表すとき〉〈前の文を強調するとき〉の役割別にまとめた表である(図4)。

終わり	中	初め	文章の性質
①考え	①考えと理由 ②考えと理由	①事実(経験) ②疑問	つなぎ言葉
③考えのまとめ	③考えと理由	③「想像」の言葉を辞書で引く	内容
④考え	④考えと理由	④「想像」を自分の経験と結び付けて考える	①「思いつかれたときのこと」
⑤考え	⑤考えと理由	⑤「想像」について自分の考えのまとめ	②「想像力について」
⑥考えと理由	⑥考えと理由	⑥「想像」に関する自分の考えのまとめと理由	③「想像」の言葉を辞書で引く
⑦考えと理由	⑦考えと理由	⑦「想像」について自分の考えのまとめ	④「想像」を自分の経験と結び付けて考える
⑧考えのまとめ	⑧考えと理由	⑧「想像」について自分の考えのまとめ	⑤「想像」に関する自分の考えのまとめと理由
⑨考え	⑨考えと理由	⑨「想像」について自分の考えのまとめ	⑥「想像」に関する自分の考えのまとめと理由
⑩考え	⑩考えと理由	⑩「想像」について自分の考えのまとめ	⑦「想像」に関する自分の考えのまとめと理由

図2 モデル文の構成表 尾括型

8 理由の文	7 誘いの文	6 伝聞の文	5 推定の文	4 命令の文	3 意見・感想・思い・考えの文	2 事実の文	1 疑問の文	文末表現で見る文の性質
〜からだ。	〜しよう。	〜だそうだ。 〜ということだ。	〜らしい。 〜だろう。	〜しなさい。	〜と考える。 〜と思う。	〜なのだ。 〜した。	〜だろうか。 〜なのか。	

図3 文末表現でみる文の性質表

10 前の文を強調するとき	9 順序を表すとき	8 例を表すとき	7 同じ内容を並べるとき	6 話題を変えるとき	5 前の文に付け加えるとき	4 前の文を打ち消すとき	3 前の文を受けるとき	2 まとめ・結果・結論を表すとき	1 理由を表すとき	つなぎ言葉表
しかも、 にもかかわらず、 それでも、	第一に、 第二に、 第三に、	例えば、 もしも、	おまじ、 あるいは、	そのころ、 さで、 一月、	また、 それから、	逆に、 しかし、 けれども、 これに反して、	だから、 したがって、 すると、	だから、 こうして、 これらことから、	理由は、 なぜなら、	

図4 つなぎ言葉表

(5) 推敲する過程について（「見直す」）

推敲する過程では、グループで下書きと構成表を照らし合わせて読み、構成に視点を当て、気付いたことを伝え合いシートを通して伝え合う。そして、伝え合いシートの友達の気付きを受けて、構成表や下書きを見直し推敲する。また、「わざ表」を活用し、表現の工夫をして清書に結び付ける。このような学習を通して、伝えたいことを的確に伝えられる文章にすることができると考える。

① 「伝え合いシート」について

「伝え合いシート」とは、グループで下書きと構成表を照らし合わせて読み、構成に視点を当て三観点で評価し、気付いたことを伝え合うワークシートである（図5）。この伝え合いシートを通した友達の気付きを生かし、構成表や下書きを見直し推敲することにより、伝えたいことを的確に伝えられる文章にすることができると考える。

② 「わざ表」について

「わざ表」とは、「光村出版国語1」を参考にして作成した、表現技法などをまとめた表である（図6）。この「わざ表」を活用して、表現の工夫をして書くことにより、豊かな表現となり、書いて伝えたいことを効果的に表現することができると考える。

2 先行研究とのつながり

植地（2007）は、「自分の考えを明確にした文章を書く力」に焦点を当てた指導・支援の在り方について研究した。「書くこと」の系統性を踏まえた具体的な指導・支援の在り方を探り、「小中9年間『書くこと』到達目標に関する一覧」を作成した。また、植地は文章の作成過程を「①発想、②取材、③選材、④構成、⑤記述、⑥推敲、⑦評価」の七つの過程として捉えた。そして、「文章の構成を考えることが自分の伝えたいことを繰り返し問い直すことにつながり、その過程が子どもの思考力を高めると考え」、「構成」「記述」に焦点を当て授業実践を行った。研究の成果として「付箋紙を使うことにより、自分の考えを明確にした文章を書くことができたと思われる」を挙げている。

この研究から、伝えたいことを的確に書くためには、文章を構成する力を身に付ける必要があると考えた。また、先行研究から明らかとなった付箋紙の有効性を本研究でも構成表の作成に生かしたいと考えた。本研究では、付箋紙を活用して構成表を作成する前段階で、構成の違いによる効果に気付かせることを通して、構成の見通しを持つことができるようにする。そして、付箋紙を活用して構成表を作成する際には、形式段落ごとに文章の性質を明らかにし、必要に応じた適切なつなぎ言葉を用いて構成を考えさせることを通して、形式段落相互の関係が明確な、構成の違いによる効果を生かした構成表を作成できるようにする。また、グループで下書きと構成表を照らし合わせて読み、構成に視点を当て気付いたことを伝え合いシートを通して伝え合い、構成表や下書きを見直し推敲し、清書に結び付ける。

このように、本研究では構成を意識した「気付く・考える・見直す」の学習を通して、伝えたいことを的確に書くことができる授業プランを構想し、活用することを提案する。

図5 伝え合いシート

図6 わざ表



V 研究の計画と方法

1 授業実践の概要

七月には「随筆」、十月には運動会の「体験文」で授業実践を行った。

授業実践は、研究協力校の小学校第6学年1組で行った。同様の指導計画で、第6学年2・3組では、学級担任が授業を行った。

(1) 「随筆」プラン

対 象	研究協力校 小学校第6学年1組 31名
実 践 期 間	平成26年7月1日～7月9日 9時間
単 元 名	「経験や想像を基に自分の思いを書こう」 ～構成の違いによる効果を生かして、自分の思いを書く～ 教材名「随筆を書こう」
単 元 の 目 標	随筆の特徴を捉え、自分の経験や想像を基に随筆を書くことができる。

(2) 「体験文」プラン

対 象	研究協力校 小学校第6学年1組 31名
実 践 期 間	平成26年9月30日～10月9日 5時間
単 元 名	「運動会作文で思いを伝えよう」 ～文章全体の構成を考え、自分の思いを的確に表現する～ 教材名「体験文を書こう」
単 元 の 目 標	相手意識や目的意識を持ち、自分の思いを効果的に書くことができる。

2 検証計画

小学校国語科「書くこと」の領域において、構成を意識した「気付く・考える・見直す」の学習を通じた授業実践により、伝えたいことを的確に書くことができる児童を育成することができたかどうかを検証する。

なお、[見通し1]については、随筆プランに絞って検証をする。[見通し2][見通し3]については、体験文プランで検証をする。

検 証 項 目	検証の観点	検証の方法
[見通し1] 構成の見通しを持つこと	構成を学ぶ過程において、頭括型・尾括型・双括型の「構成3パターン」のモデル文を基に構成の違いによる効果に気付かせることは、自分が書こうとしている文章構成への見通しを持つことに有効であったか。	※随筆プランで検証 ・児童観察 ・構成表 ・アンケート
[見通し2] 効果的な構成にすること	構成表を作成する過程において、形式段落ごとに文章の性質を明らかにし、必要に応じた適切なつながり言葉を用いて構成を考えさせることは、形式段落相互の関係が明確な、構成の違いによる効果を生かした構成にすることに有効であったか。	※体験文プランで検証 ・構成表 ・下書き ・アンケート
[見通し3] 的確に伝えることができる文章にすること	推敲する過程において、グループで下書きと構成表を照らし合わせて読み、構成に視点を当て気付いたことを伝え合いシートを通して伝え合い、構成表や下書きを見直し推敲させることは、伝えたいことを的確に伝えることができる文章にすることに有効であったか。	※体験文プランで検証 ・構成表 ・伝え合いシート ・作品 ・アンケート

3 抽出児童

A	順序よく文章を書くことはできるが、読み手に伝えたいことを的確に伝えることができるように構成を工夫して書く力は、まだ身に付いていない。また、自分の思いや考えを伝えられたという実感に乏しい。「構成3パターン」のモデル文から構成の違いによる効果をつかませ、読み手に伝えたいことを的確に伝えることができるように構成の工夫をして書く力を身に付けさせたい。さらに、書き上がった文章を相手意識を持つ際に設定した相手に読んでもらい適切な評価や感想をもらうことを通して、書いて伝えられた喜びを実感させたい。
B	自分の思いを的確に伝えることができる文章を書きたいと思っはいるが、どのように文章を組み立てて書いたらよいかつかずいている。頭括型・尾括型・双括型の「構成3パターン」のモデル文を基に構成について学ぶことを通して、構成を意識して文章を書くことができる力を身に付けさせたい。

4 評価規準

(1) 「随筆」プラン

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
自分で随筆を書いたり、友達の作品を読んだりしようとしている。	文章全体の構成を考え、自分の経験や想像を基に随筆を書いている。	自分の書こうとする随筆にふさわしい語句を選んだり、語順を考えたりしている。

(2) 「体験文」プラン

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
運動会を通して、伝えたい思いを体験文にして、家族に伝えようとしている。	自分の伝えたいことを的確に表現するために、文章全体の構成を考え、自分の経験を基に体験文を書いている。	自分の書こうとする体験文にふさわしい語句を選んだり、語順を考えたりしている。

5 指導計画

(1) 「随筆」プラン

時	主な学習活動	指導上の留意点及び支援	【観点】評価規準（評価方法）
1	<ul style="list-style-type: none"> 随筆がどのようなものかをつかみ、書く手順を理解する。 ワークシート 	<ul style="list-style-type: none"> 教科書P26の「ここが大事」を読み返すことを通して、随筆の特質について理解させる。 今まで読んできた「薫風」「迷う」「枕草子」を振り返り、随筆とはどのような文章であるかを確認する。 	<p>【書】随筆を書く手順を理解している。</p> <p>（ワークシート・児童観察）</p> <p>【関】随筆を書くことへの意欲を持っている。（児童観察）</p>
2	<ul style="list-style-type: none"> 主題を決定し、題材を収集する。 付箋紙（ピンク色、水色） ワークシート 	<ul style="list-style-type: none"> 相手意識や目的意識を持たせ、誰に何を伝えるのかを明確にさせる。 ウェビングの手法を用いて、思いや考えを広げさせる。 一番伝えたいことは、文章でピンク色の付箋紙に書き、伝えたいことのきっかけとなった出来事などの題材を水色の付箋紙に言葉や短い文で書かせる。 	<p>【書】書きたいことの主題を決め、伝えたいことを明確にして、題材を収集している。（ワークシート）</p>
3	<ul style="list-style-type: none"> モデル文を基に「構成3パターン」の学習をする。 モデル文 ワークシート <p>[見通し1] 「構成3パターン」のモデル文を基に構成の違いによる効果に気付かせることにより、自分が書こうとしている文章構成への見通しを持つことができたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 頭括型・尾括型・双括型の「構成3パターン」の構成の違いによる効果に気付かせるために、三つのモデル文を読み比べたり、構成表を基に構成の分析をしたりする。 	<p>【書】構成の違いによる効果に気付いている。</p> <p>（ワークシート・児童観察）</p>
4	<ul style="list-style-type: none"> 構成表を作成する。 構成表 文末表現で見る文の性質表 つながぎ言葉表 <p>[見通し2] 形式段落ごとに文章の性質を明らかにし、必要に応じた適切なつながぎ言葉を用いて構成を考えさせることにより、形式段落相互の関係が明確な、構成の違いによる効果を生かした構成にすることができたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 一番伝えたいことを文章で書いたピンク色の付箋紙と、題材を言葉や短い文で書いた水色の付箋紙の配置を考え、構成表を作成させる。 形式段落相互の関係を明確にするために、形式段落ごとに文章の性質を明らかにして、必要に応じた適切なつながぎ言葉を用いて構成を考えさせる。 	<p>【書】形式段落相互の関係が明確な、構成の違いによる効果を生かした構成表を作成することができている。（構成表）</p>
5 6	<ul style="list-style-type: none"> 構成表を基に、随筆の下書きをする。 構成表 わざ表 原稿用紙 	<ul style="list-style-type: none"> 構成表に基づいた構成で書く。 伝えたいことを的確に伝えるために、経験を交えたり、表現の工夫をしたりして書かせる。 表現の工夫をして書けるように、わざ表を配付して活用させる。 	<p>【書】構成表に基づいた構成で経験を交えたり、表現の工夫をしたりしながら書いている。（構成表・下書き）</p>
7	<ul style="list-style-type: none"> グループでの伝え合い活動を生かし、下書きを推敲する。 推敲を基に清書する。 構成表 下書き 伝え合いシート わざ表 <p>[見通し3] グループで下書きと構成表を照らし合わせて読み、構成に視点を当て気付いたことを伝え合いシートを通して伝え合い、構成表や下書きを見直し推敲させることにより、伝えたいことを的確に伝えることができる文章にすることができたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 伝え合い活動が有効な推敲に結び付くように、構成に視点を当て三観点で評価（○△）させ、気付いたことを伝え合いシートに書いて伝え合わせる。 <p>[三観点]①構成表に基づいた構成で書いてあるか。②具体的な経験や思いが書いてあるか。③文章の性質を明らかにし、つながぎ言葉を適切に用いて書いてあるか。</p>	<p>【書】伝えたいことが相手に的確に伝わる文章に推敲し、清書している。（清書）</p> <p>【言】自分の書こうとする随筆にふさわしい語句を選んだり、語順を考えたりしている。（清書）</p>

8	・書き上げた作品を交流し合う。	・作品を交流し合うことを通して、友達の思いや考えを知るとともに、文章のよさを感じ取ることができるようにする。	【書】 友達の思いや考えを知るとともに、文章のよさを感じ取っている。(交流シート・児童観察)
9	・清書 ・交流シート		

(2) 「体験文」プラン

時	主な学習活動	指導上の留意点及び支援	【観点】評価規準(評価方法)
1	・運動会作文の主題を決定し、題材を収集する。 ・付箋紙 (ピンク色、水色) ・ワークシート	・運動会の印象的な出来事を想起させることを通して、運動会作文を書こうとする意欲を引き出す。 ・相手意識や目的意識を持たせ、誰に何を伝えるのかを明確にさせる。 ・一行日記や写真などを参考にさせ、主題に基づいた題材を収集できるようにする。	【関】 運動会を通した思いを体験文に書いて、家族に伝えようとしている。(児童観察) 【書】 伝えたいことを明確にして、題材を収集している。 (ワークシート)
2	・形式段落相互の関係が明確な、構成の違いによる効果を生かした効果的な構成表を作成する。 ・構成表 ・文末表現で見る文の性質表 ・つなぎ言葉表	・自分が書こうとしている文章構成への見通しを持って構成を考えることができるように、「構成3パターン」の構成の違いによる効果について確認する。 ・伝えたいことを的確に伝えるための最適な構成となるように、見通しを持った構成のパターンで付箋紙を配置しながら構成を考えさせる。 ・形式段落相互の関係を明確にするために、形式段落ごとに文章の性質を明らかにし、必要に応じた適切なつなぎ言葉を用いて構成を考えさせる。 ・構成の意図が分かるように、構成の選択理由や工夫を構成表に記入するよう指示する。	【書】 形式段落相互の関係が明確な、構成の違いによる効果を生かした構成表を作成している。(構成表)
[見通し1・2] 文章構成への見通しを持たせ、形式段落ごとに文章の性質を明らかにし、必要に応じた適切なつなぎ言葉を用いて構成を考えさせることにより、形式段落相互の関係が明確な、構成の違いによる効果を生かした構成にすることができたか。			
3	・下書きをする。 ・構成表 ・わざ表 ・原稿用紙	・構成の効果を生かして書くことができるように、構成表に基づいた構成で下書きをさせる。 ・伝えたいことを的確に伝えるための表現の工夫ができるように、表現技法などをまとめたわざ表を活用させる。	【書】 構成表に基づいた構成で、構成の効果を生かして書いている。(下書き)
4	・グループでの伝え合い活動を生かし、下書きを推敲する。 ・構成表 ・下書き ・伝え合いシート ・わざ表	・伝え合いシートを用いて三観点で評価(○△)させ、読みの気付きを書いて伝え合わせる。 [三観点]①構成表に基づいた構成で書いてあるか。②具体的な経験や思いが書いてあるか。③文章の性質を明らかにし、つなぎ言葉を適切に用いて書いてあるか。 ・伝えたいことを的確に書くことができるように、友達の気付きを受け、構成表や下書きを見直し推敲させる。	【書】 伝えたいことが相手に的確に伝わる文章に、推敲している。(推敲した文章) 【言】 自分の書こうとする運動会作文にふさわしい語句を選んだり、語順を考えたりしている。(清書)
[見通し3] グループで下書きと構成表を照らし合わせて読み、構成に視点を当て気付いたことを伝え合いシートを通して伝え合い、構成表や下書きを見直し推敲させることにより、伝えたいことを的確に伝えることができる文章にすることができたか。			
5	・下書きを清書する。 ・単元全体を振り返り、学習したことをまとめる。	・的確に書いて読み手に思いを伝えることができるように、推敲した文を基に丁寧に正しく書かせる。 ※書き上げた運動会作文は、親に読んでもらう。	【書】 伝えたいことを的確に書いている。(清書)

VI 研究の結果と考察

伝えたいことを的確に書くことができる児童の育成のために、構成を意識した「気付く・考える・見直す」の学習の有効性を、三つの検証項目に沿って「学習活動の概略と学習全体の様子」「抽出児童の様子」「アンケート結果」の三つの観点から考察する。

1 構成の見通しを持つこと〔見通し1〕 ※随筆プランで検証

(1) 学習活動の概略と学習全体の様子から

「構成3パターン」のモデル文を基にした学習後に、児童に随筆をどのような構成で書きたいかを問うと、はっきりとした意思を持って自分が書こうとしている構成のパターンを示した。そして、「最後までじっくり読んでもらい、最後に自分の考えを伝えたいから、尾括型で書きたいです」というように、尾括型で構成を考える児童が多かった。このように、自分が書こうとしている文章構成への見通しを持ち、意欲的に構成表の作成に取り組んでいた。

構成表作成時に書かせた「構成の選択理由や工夫」には、次のようなことが書かれていた(表1)。

表1 構成の選択理由や工夫「随筆プラン」より

<ul style="list-style-type: none"> ・じっくり最後まで文章を読んでもらって、最後に自分の考えを伝えたいので尾括型で書く。「中」は、事実や経験などを交えて書く。 ・リフティングの説明をしてから、伝えたいことを書いたほうが相手に分かりやすいと思ったから、尾括型で書く。 ・最初に自分の考えをまとめて伝えたいから、頭括型にする。「中」に事実や考えを書いて理由を伝える。 ・二度書いて、しっかりとわたしの考えをみんなに伝えたいから、双括型で書く。
--

児童は、根拠を持って「構成3パターン」から構成を選択し、構成を考えている様子が分かる。

これらの結果から、児童は頭括型・尾括型・双括型の「構成3パターン」のモデル文を基にした構成の学習により、構成の違いによる効果に気づき、自分が書こうとしている文章構成への見通しを持つことができたといえる。

学級担任が授業を行った第6学年2・3組でも、1組と同様な結果が得られ、児童はどのような構成で文章を書くかの見通しを持つことができたといえる。

(2) 抽出児童の様子から

「随筆」学習の単元終了後に行った抽出児童A Bのアンケート結果は、次のとおりであった(表2)。

表2 「随筆」学習の単元終了後に行った抽出児童のアンケート結果

アンケートの質問項目	抽出児童A	抽出児童B
・「構成3パターン」の構成の違いや効果は、分かりましたか	よく分かった	よく分かった
・構成について学んだことは、文章構成への見通しを持つことに役に立ちましたか	とても役に立った	とても役に立った
	「感想」より	
抽出児童A	・随筆なんて難しくて書けないと思ったけれど、やってみると面白くて、意外とすらすら書けた。文を書くのが、前より好きになれてよかった。	
抽出児童B	・モデル文を読んだり、どのような順序で書けばよいのかを学習したりしたことで、自分が書くときにとても役に立った。	

「構成3パターン」の構成の違いや効果が分かったかについてのアンケートでは、抽出児童の二人とも「よく分かった」と答え、自分が書こうとしている文章構成への見通しを持つことに役立ったかについても、「とても役に立った」と答えている。

抽出児童Aは「わたしの考える絵」の題名で構想を練り、構成の選択理由として「しっかりと自分の考えを伝えたいから双括型で書く」としている。抽出児童Bは「ピアノ」の題名で構想を練り、構成の選択理由として、「ピアノは何年もやっていて、いろいろな思い出があるから、それを順番に書き、尾括型で伝える。最後には、オチを入れる」とある。

これらの結果から、抽出児童A Bはモデル文を基にした構成の学習により、構成の違いによる効

果に気づき、自分が書こうとしている文章構成への見通しを持つことができたといえる。

(3) アンケート結果から（「随筆」学習の単元終了後に行ったアンケート結果）

児童に「構成3パターン」の違いや効果が分かったかについてアンケートを実施したところ、86%の児童が「よく分かった」、14%の児童が「だいたい分かった」としている。また、構成について学んだことは、文章構成への見通しを持つことに役に立ったかについては、78%の児童が「とても役に立った」、22%の児童が「少し役に立った」としている。

児童が「随筆」学習の単元終了後に行ったアンケートに書いていた感想である（表3）。

表3 「随筆」学習の単元終了後に行ったアンケートの感想

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・この勉強で、文章を書くときの構成が学べた。・今まで文章を書くとき、あまり何も考えずに書いていたが、この勉強で構成を考えて書くことができるようになった。・頭括型、尾括型、双括型の構成が分かった。・3パターンの構成を学んだから、随筆が書けました。・「構成3パターン」の違いと効果が分かった。 |
|--|

これらのアンケート結果から、児童は構成の違いや効果をつかむことができ、また、それを生かして書くことができた実感していることが分かる。

このように、検証の[見通し1]である、「構成3パターン」のモデル文を基に構成の違いによる効果に気付かせる学習を組み込んだことは、自分が書こうとしている文章構成への見通しを持つことに有効であったと考える。

2 効果的な構成にすること [見通し2] ※体験文プランで検証

(1) 学習活動の概略と学習全体の様子から

構成表を配付すると、児童は見通しを持った構成のパターンで構成を考えていた。主題である一番伝えたいことを書いたピンク色の付箋紙と、その一番伝えたいことを伝えるための題材である水色の付箋紙を貼ったり、はがしたりしながら配置を考えていた。また、付箋紙を付け足したり、減らしたりしながら構成を考える児童も見られた。この学習の中で、伝えたいことを的確に伝えるための最適な構成に気づき、見通しを持った構成のパターンを変更して、構成を考える児童も見られた。主題と題材とに色分けして付箋紙を活用したことで、構成を考える児童にとっても、指導者にとっても一目で構成のパターンが分かった（図7）。

付箋紙の配置が決まると、形式段落ごとに文章の性質を明らかにし構成表に書き込んでいた。次に、必要に応じたつなぎ言葉を書き込み構成を考えていた。そして、構成表に書き込んだ「構成の選択理由や工夫」を見直し、構成表を完成させていた。

この学習により、形式段落相互の関係が明確となり、構成の違いによる効果を生かした構成表を作成することができた。そして、児童からは「早く下書きに入りたい」「すぐに、書きたい」といった意欲的な言葉が聞かれた。

児童Cの構成表を作成する過程の様子について示すと、児童Cが最初に考えた尾括型の構成は、出来事の起こった

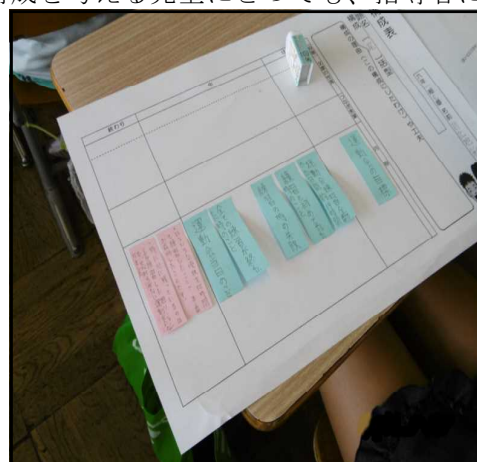


図7 構成表作成の様子

順序で題材が配置されていた（P11図8）。しかし、文章の性質とつなぎ言葉を明確にする過程で題材の配置の変更があり、④の「練習でつらかったときのこと」が、⑦の「一番伝えたいこと」のすぐ前に移動された（P11図9）。児童Cに④の題材の配置について尋ねたところ、「一番伝えたいことに関わる題材なので、一番伝えたいことのすぐ前に書いたほうがより伝わると思ったから」と述べていた。④の段落は、「思い返すと」で始まり、運動会練習時の裸足のつらさや筋肉痛のつらさなどが書かれていた。そして、⑦の段落は「でも」で始まり「つらかったり失敗したりしたことがあったからこそ、運動会の成功につながったのだと思う」という文章で締めくくられていた。

この児童Cの作文は、形式段落相互の関係が明確な、構成の違いによる効果を生かした構成となり、変更後の構成は、最初に考えた構成より伝えたいことがよりの確に伝わる効果的な構成になったといえる。

終わり	中	初め
⑦運動会の練習でつらかったり、失敗したりしたことがあったからこそ…	⑥運動会当日のこと ⑤親のメッセージを聞いたときのこと ④練習でつらかったときのこと	①運動会の目標 ②運動会の練習が始まったときのこと ③○○ソランを踊っているときのこと

図8 児童Cが最初に考えた構成

終わり	中	初め
⑦運動会の練習でつらかったり、失敗したりしたことがあったからこそ…	④練習でつらかったときのこと ⑥運動会当日のこと ⑤親のメッセージを聞いたときのこと	①運動会の目標 ②運動会の練習が始まったときのこと ③○○ソランを踊っているときのこと

図9 児童Cの変更後の構成

これらの結果から、形式段落ごとに文章の性質を明らかにし、必要に応じた適切なつなぎ言葉を用いて構成を考えさせることにより、形式段落相互の関係が明確な構成の違いによる効果を生かした構成にすることができたといえる。

学級担任が授業を行った第6学年2・3組でも、1組と同様な結果が得られ、学級担任の話によると、「構成のパターンが児童の中に浸透しており、児童は、文章の性質やつなぎ言葉を明確にしながら効果的な構成を考えていた」と述べていた。このことから、同学年他学級においても、児童は伝えたいことを的確に書くための効果的な構成を考えることができたといえる。

(2) 抽出児童の様子から

抽出児童A Bは、形式段落ごとに文章の性質を明らかにし、必要に応じた適切なつなぎ言葉を用いて、尾括型で構成を考えていた(図10、図11)。付箋紙の配置をあれこれ考えながら、構成表に書き込みをしたり、二つの題材を合体させたりして構成を練っていた。

終わり	中	初め	構成理由
⑦(下り) 身持ち	⑥身持ち ⑤身持ち ④身持ち	③身持ち ②身持ち ①身持ち	構成理由(この構成にしたわけ)や工夫 順序がわかりにくいので、最後までいじり込んで同じ身持ちを味わせた。味わせたほうが、筋が通る。
練習と音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習	練習と音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習	練習と音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習	練習と音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習

図10 抽出児童Aの構成表

終わり	中	初め	構成理由
⑦(下り) 身持ち	⑥身持ち ⑤身持ち ④身持ち	③身持ち ②身持ち ①身持ち	構成理由(この構成にしたわけ)や工夫 順序がわかりにくいので、最後までいじり込んで同じ身持ちを味わせた。味わせたほうが、筋が通る。
練習と音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習	練習と音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習	練習と音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習	練習と音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習、音楽の練習

図11 抽出児童Bの構成表

「体験文」学習の単元終了後に行った抽出児童のアンケート結果は、次のとおりであった(表4)。

表4 「体験文」学習の単元終了後に行った抽出児童のアンケート結果

アンケートの質問項目	抽出児童A	抽出児童B
・「構成3パターン」の構成の違いによる効果を生かして構成を考えることができましたか	だいたいできた	よくできた

・文章の性質やつなぎ言葉を確認しながら構成表を作成したことは、段落の関係を明らかにするのに役に立ちましたか	とても役に立った	とても役に立った
「感想」より		
抽出児童 A	・構成を考えて文章を書き、作文を書くことが楽しくなった。	
抽出児童 B	・自分の思いの表し方を覚えることができました。構成表を作ったことでしっかりと書くことができました。今まで、作文をこんなにいろいろな構成を考えて書くことはなかったので、とても勉強になりました。	

抽出児童は、「構成3パターン」の構成の違いや効果を生かして構成を考えることができたかについて、「だいたいできた」「よくできた」と答えている。また、文章の性質やつなぎ言葉を明確にしながらか成表を作成したことは、形式段落相互の関係が明確な構成にするのに、「とても役に立った」と二人とも答えている。

さらに、抽出児童Bは、文章の性質やつなぎ言葉を確認しながら構成表を作成したことで、文章を「しっかりと書くことができた」と実感している。これは、形式段落相互の関係が明確な構成の違いによる効果を生かした構成で文章を書くことができたことによるといえる。

これらの結果から、抽出児童ABは構成表を作成する過程において、形式段落ごとに文章の性質を明らかにし、必要に応じた適切なつなぎ言葉を用いて構成を考えさせたことにより、形式段落相互の関係が明確な、構成の違いによる効果を生かした構成にすることができたといえる。

(3) アンケート結果から（「体験文」学習の単元終了後に行ったアンケート結果）

児童に「構成3パターン」の構成の違いによる効果を生かして構成を考えることができたかのアンケートを実施したところ、78%の児童が「よくできた」、22%の児童が「だいたいできた」としている。また、文章の性質やつなぎ言葉を確認しながら構成表を作成したことは、形式段落相互の関係を明らかにするのに役に立ったかについては、72%の児童が「とても役に立った」、28%の児童が「少し役に立った」としている。

児童が「体験文」学習の単元終了後に行ったアンケートに書いていた感想である（表5）。

表5 「体験文」学習の単元終了後に行ったアンケートの感想

<ul style="list-style-type: none"> ・文章の構成を構成表を作って考えたので、伝えたいことをしっかりと書くことができてよかった。 ・作文を書くのは苦手だけど、構成表を作って書くだけで、自分の伝えたいことを相手にしっかりと伝えられるように書くことができて、こんなに変わるんだなあと思った。 ・文章の性質やつなぎ言葉を意識して書けるようになってよかった。 ・構成を考えて文章が書けるようになったり、つなぎ言葉を意識して書いたりすることが身に付いたと思います。この学習は、たくさんの場面でとても役に立つと思いました。

児童の感想から、児童は構成表の有効性に気付くとともに、文章の性質やつなぎ言葉を確認しながら構成を考えたことにより、効果的な構成にすることができたと感じている様子が分かる。また、児童は構成を考えたり、つなぎ言葉を意識したりして書く力を身に付けることができた実感している。そして、この学習が他の学習場面でも役立つことに気付いていることが分かる。

このように、検証の[見通し2]の形式段落ごとに文章の性質を明らかにし、必要に応じた適切なつなぎ言葉を用いて構成を考えさせたことは、形式段落相互の関係が明確な、構成の違いによる効果を生かした構成にすることに有効であったと考える。

3 的確に伝えることができる文章にすること [見通し3] ※体験文プランで検証

(1) 学習活動の概略と学習全体の様子から

4・5人編成によるグループで、構成表を基に書いた下書き（図12）と構成表を照らし合わせて読み、構成に視点を当て三観点について○△で評価し、気付いたことを伝え合いシートを通して伝え合った（P13図13）。三観点とは、「①構成表を基にした構成で書いてあるか」「②一番伝えたいことがよく伝わる具体的な



図12 構成表に基づいた下書きの様子

童Bの下書きは、形式段落相互の関係が明確で、構成の違いによる効果を生かした構成で書かれていたといえる。抽出児童Bは構成の変更点はなかったが、抽出児童A同様に比喻表現を用いたり、会話文で始まる書き出しの工夫をしたりして下書きを見直し推敲していた。

「体験文」学習の単元終了後に行った抽出児童のアンケート結果は、次のとおりであった（表7）。

表7 「体験文」学習の単元終了後に行った抽出児童のアンケート結果

アンケートの質問項目	抽出児童A	抽出児童B
・伝え合い活動でアドバイスし合ったことは、推敲に役立ちましたか	少し役に立った	少し役に立った
「感想」より		
抽出児童A	・下書きを友達に読んでもらい、推敲して作文が完成したときは、とてもうれしかった。作文を書くことが楽しくなったし、好きになった。また、作文を家の人に読んでもらいたいと思った。	
抽出児童B	・比喻を使って書くことができよかったです。ワークシートに友達からのコメントが書かれていたので書きやすかったです。	

抽出児童は、伝え合い活動でアドバイスし合ったことは、推敲に役立ったかについて、二人とも「少し役立った」と答えている。下書きが、既に伝えたいことを的確に書けていたために役に立ったのは「少し」と、捉えているようだ。

また、「感想」から、グループによる伝え合いシートを通じた伝え合い活動により、友達に認めてもらい、大きな自信や意欲を持つことができたといえる。

また、書き上がった抽出児童A Bの文章は、構成表や下書きを見直し推敲したことにより、伝えたいことが的確に書かれていた。



図15 保護者からの手紙

自分の思いや考えを的確に

伝えることができたという実感に乏しい抽出児童Aは、伝えたい相手として設定した母親に作文を読んでもらい、母親から手紙を受け取った（図15）。この手紙を読んだ抽出児童Aは、「自分の思いをしっかり書いて伝えることができたと思う。お母さんがこの作文を書く前より上手になったと言ってくれて嬉しかった」と感想に書いていた。

このことから、抽出児童Aは伝えたいことを的確に書くことができ、また、母親からの手紙により、書いて伝えられた喜びを実感することができたといえる。

(3) アンケート結果から

伝え合い活動でアドバイスし合い、構成表や下書きを見直し推敲したことは、伝えたいことを的確に書くことに役立ったかについてアンケートを実施したところ、61%の児童が「とても役に立った」、36%の児童が「少し役に立った」、3%の児童が「あまり役に立たなかった」としている。

児童が「体験文」学習の単元終了後に行ったアンケートに書いていた感想である（表8）。

表8 「体験文」学習の単元終了後に行ったアンケートの感想

<ul style="list-style-type: none"> ・グループのみんなが、いろいろアドバイスをしてくれたので、とてもいい作文が書けた。 ・グループごとに下書きをアドバイスし合った学習は、いいなあと思う。グループごとのアドバイスでみんながいいところと悪いところをはっきり詳しく言ってくれたので、とてもうれしく楽しかった。 ・自分では、気付かないことを教えてもらえてよかった。 ・アドバイスしてもらったことを自分で見直し、推敲できたことがよかった。 ・自分の作文と友達の作文を交換してみて、自分の間違っているところや、友達のいいところが見付かってとても勉強になりました。

アンケート結果や感想から、グループによる伝え合い活動の有効性に気づき、伝え合い活動を通して見直し推敲したことにより、「いい作文が書けた」と実感していることが分かる。

このように、検証の[見通し3]であるグループで下書きと構成表を照らし合わせて読み、構成に視点を当て気付いたことを伝え合いシートを通して伝え合い、構成表や下書きを見直し推敲させたことは、伝えたいことを的確に伝えることができる文章にすることに有効であったと考える。

授業実践前の文章（説明文や報告文など）と、授業実践後の文章（随筆と体験文）の評価の比較を行った（図16）。「①自分の考えを明確に表現するため、文章全体の構成の効果を考えている」「②事実と感想、意見などを区別して書いている」「③表現の効果などについて確かめたり、工夫したりしている」の三観点からA（十分満足できる状況と判断されるもの）、B（おおむね満足できる状況と判断されるもの）、C（努力を要する状況と判断されるもの）の三段階で評価した。実践前の評価は、Aが30%、Bが70%であった。それに対して実践後の評価は、Aが73%、Bが27%でA評価は43ポイント増えた。

「随筆」と「体験文」の学習終了後に、自分の伝えたいことを的確に書くことができたかどうか自己評価させたところ、74%の児童が「できた」、26%の児童が「だいたいできた」としている。この数値は、実践後の文章をABCの三段階で評価した結果とほぼ同じ数値である。

この結果から、児童は伝えたいことを的確に書くことができ、また、伝えたいことを的確に書くことができたと実感していることが分かる。

授業実践対象学級担任と、同学年他学級担任の話によると、「児童は、自分の伝えたいことを読み手に的確に伝えるために、論を立て構成の効果を生かし伝えたいことを的確に書いていた」と述べていた。

このように、検証の[見通し3]のグループで下書きと構成表を照らし合わせて読み、構成に視点を当て気付いたことを伝え合いシートを通して伝え合い、構成表や下書きを見直し推敲させたことは、伝えたいことを的確に伝えることができる文章にすることに有効であったと考える。

以上の結果から、構成を意識した「気付く・考える・見直す」の学習を通して、伝えたいことを的確に書くことができる児童を育成することができたといえる。

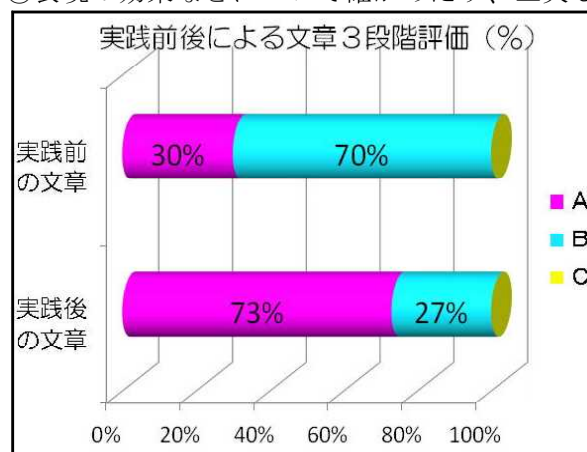


図16 実践前後による文章3段階評価

Ⅶ 研究のまとめ

1 成果

- 構成を意識した「気付く・考える・見直す」の学習を通して、児童は構成の違いによる効果を生かし伝えたいことを的確に書く力を身に付けることができた。
- 相手意識を持つ際に設定した相手（随筆では「クラスの友達」、運動会の体験文では「親」）に書き上がった文章を読んでもらい、適切な評価や感想をもらうことができた。そして、児童は書いて伝えられた喜びを実感し、書くことへの自信や意欲を持つことができた。
- 学級担任が授業を行った6年2組・3組においても、6年1組と同様な成果を得ることができ、本研究の汎用性が認められた。

2 課題

- 構成表を作成する際、形式段落ごとに文章の性質を明らかにする学習が難しかったとする児童が見られた。この課題を解決するためには、文章を読む際に構成をつかんで読ませ、そして、そ

の「読むこと」で学んだことを「書くこと」の学習で生かせるように、二つの領域を結び付けた指導の工夫が必要である。

Ⅷ より良い実践に向けて

1 構成を意識した学習は国語科における総合的な力の向上につながる

本研究は、国語科の「書くこと」の領域における構成に視点を当てた研究であった。構成を意識した学習は「書くこと」の領域に限らず、他の領域でも生かされ必要とされる。「話すこと・聞くこと」の領域においては、構成を意識することにより、伝えたいことを的確に話したり、聞いたりすることができる。また、「読むこと」の領域においては、文章の構成をつかんで読むことにより、的確に内容を読み取ることができる。このように、構成を意識した学習は、国語科における総合的な力の向上につながると考える。

2 「書くこと」の学習を他教科等と関連させることにより効果的に学習を進めることができる

「書くこと」の学習過程には、主題の設定、題材の収集から交流、評価まで様々な学習過程がある。これらの学習を他の教科や領域と組み合わせ複合単元を構想することにより、学習の質が高まり、充実した授業となる。そして、それぞれの単元のねらいに迫ることができる。また、学習時間の確保にもつながる。このように、「書くこと」の学習を他教科等と関連させて指導することにより、効果的に学習を進めることができると考える。

<参考文献>

- ・文部科学省 『小学校学習指導要領解説 国語編』 東洋館出版社（2008）
- ・国立教育政策研究所 教育課程研究センター 『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 国語】』 教育出版（2013）
- ・中渕 正堯 監修 石丸 憲一・岸本 憲一良・香月 正登 編著 『「新たな学び」を支える国語の授業 思考力・判断力・表現力の育成を目指して』 三省堂（2013）
- ・狩野 萌子 著 『文詩集「かわさき」52号』 川崎市立小学校国語研究会編（2008）
- ・森川 正樹 著 『どの子も必ず身に付く書く力』 学陽書房（2013）
- ・植地 洋子 著 『国語科における小中9年間の「書くこと」の系統性を踏まえた具体的な指導・支援の在り方』 京都市総合教育センター（2007）
- ・鹿児島県鹿屋市輝北小学校研究公開要領 『読む楽しさを味わうことができる読書指導の充実を目指して～「読み」が成立する授業の創造と読書環境の整備を通して～』 鹿児島県鹿屋市立輝北小学校（2014）
- ・宮地 裕（ほか31名）著 『文部科学省検定済教科書 国語1』 光村図書出版（2012）

<担当指導主事>

佐藤 淳 上原 清司